

三次市向江田町所在

宮の本第 20～26 号古墳

遺跡見学会資料

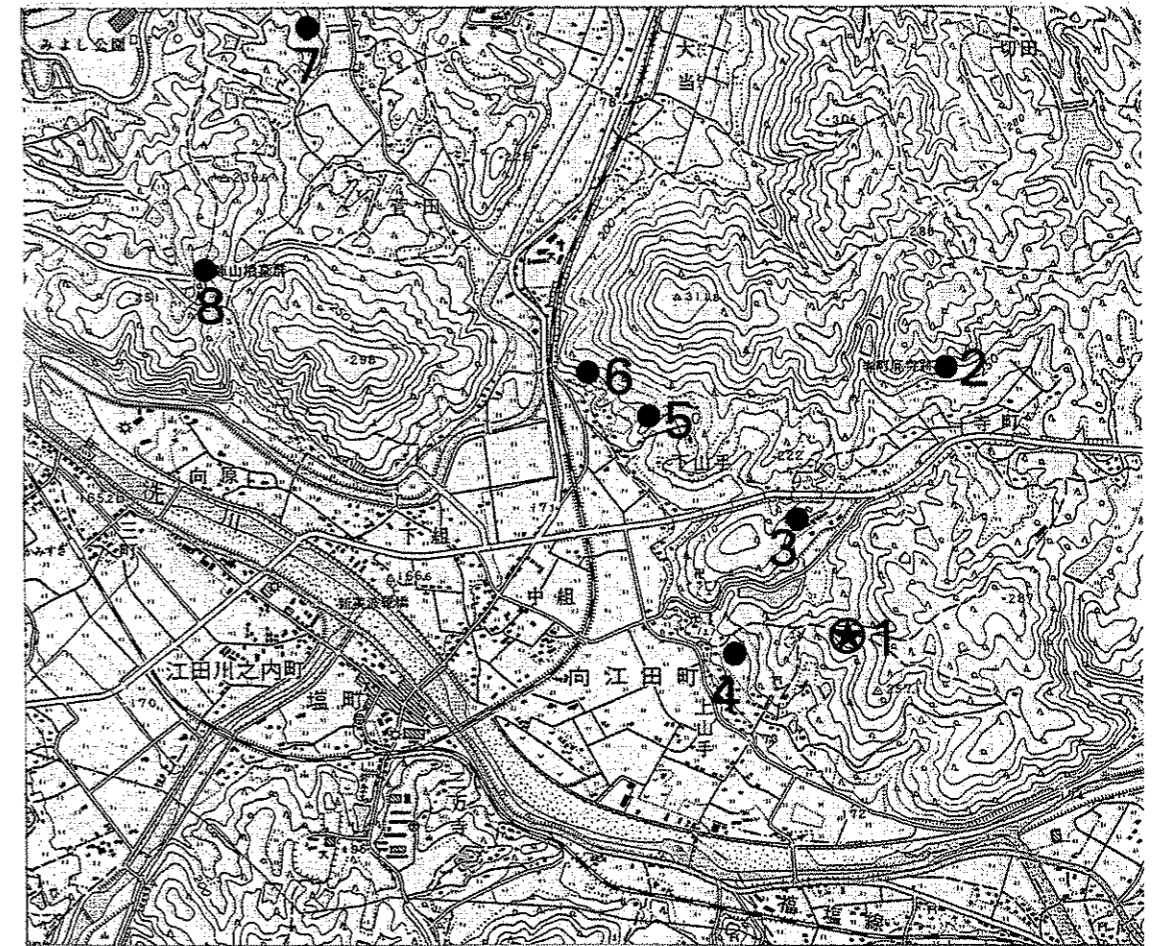
平成 19 (2007) 年 10 月 20 日 (土)

財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

1. はじめに

宮の本第 20～26 号古墳は三次市街の北東 9 km の江の川支流馬洗川北岸に所在する古墳時代前～後期の古墳群です。今回、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って、4 月 16 日から 9 か月間の予定で発掘調査を実施することになりました。古墳群の様子がかかりはつきりしてきたので、三次市教育委員会と共催で遺跡見学会を開催することになりました。

宮の本古墳群は向江田町の東部に位置し、標高 287m の山塊から西に派生する丘陵上に計 30 基余りの古墳が存在しています。今回調査を行った 7 基は古墳群の北西部に位置し、ほぼ東から西に延びる丘陵尾根上に立地します (標高 248m、北側平野部からの比高 50m)。周辺には前方後円墳を含む数多くの古墳が造られている一方で、弥生時代の陣山墳墓群や古代の寺町廃寺跡・上山手廃寺跡が存在するなど、古代の備後国北部の中核の地であったと思われます。

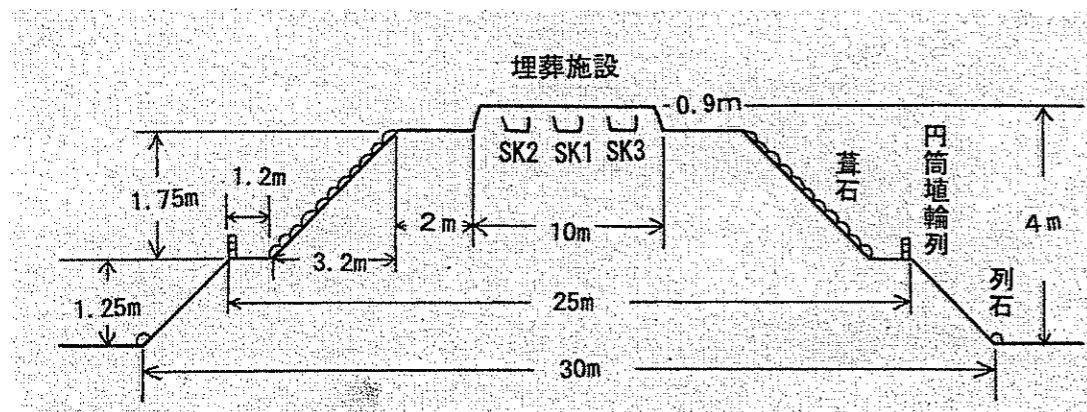


第 1 図 宮の本第 20～26 号古墳の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

- 1 宮の本第 20～26 号古墳 2 寺町廃寺跡 3 下山手第 4・5 号古墳 4 上山手廃寺跡
5 箱山第 3～6 号古墳 6 瀬戸越南古墳 7 権現第 1～3 号古墳 8 陣山墳墓群

2. 調査の概要

宮の本第 20～26 号古墳（計 7 基）は、直径 30m、高さ 3.5m の大型の円墳第 24 号古墳を取り巻くように西～南～東に半円形に径 8～16m の円墳 6 基（第 20～23・25・26 号古墳）が存在します。このことから、これら 7 基の古墳は互いに強い紐帯のもとに築かれたものであることが窺われます。その中心はいうまでもなく、最大規模で古墳群の中央に築かれた第 24 号古墳です。この古墳の墳頂には径 14m の平坦面が存在し、その中央は径 10m、高さ 1m 弱高まり、周囲は幅 2m のテラス状になっています。中央の高まりには東西方向に長軸をもつ埋葬施設 3 基が並んで築かれていました。中央の竪穴式石室（SK1）が最初に造られ、その後北側の大型箱式石棺（SK2）、南側の箱式石棺（SK3）が構築されたと思われます。SK1・3 はいずれも後世に盗掘され、一定の破壊を受けています。特に、SK3 は大半の石材を失っています。SK2 は内法の長さが 2.9m と箱式石棺としてはかなり大型で、両側石には分厚く大型の板石を縦長に立てており、蓋石にも分厚く大型の石材を 6 枚用いていました。側石・蓋石は箱式石棺的な石材の用い方をしていますが、被葬者の足元側と思われる西側小口部は数枚の石材を平積みしており、竪穴式石室的な石材の用い方をしていました。また、頭部の東小口には何らの石材もみられませんでした。今では腐朽した板材のようなものが存在した可能性もあります。床には数 cm 大の円礫を敷いており、中央が凹んでいることから、割竹形木棺を安置していたものと思われます。頭部の東小口に近い礫床上で径 5.9cm の小型鏡が出土しています。なお、SK1 からは出土遺物はありませんが、いずれも原位置を失っています。3 基の埋葬施設の周囲、特に SK1 と SK2 の間からは円筒埴輪とは異なる埴輪片が比較的多く出土しています。家形などの形象埴輪片の可能性がありますが（中には数点赤く塗られた破片もあります）。なお、テラス部分には恐らく円筒埴輪が樹立されていたであろうことは、後述する葺石上に多くの大型の埴輪片が転落していたことから容易に窺えますが、残念ながら、埴輪が樹立した状態で検出すること



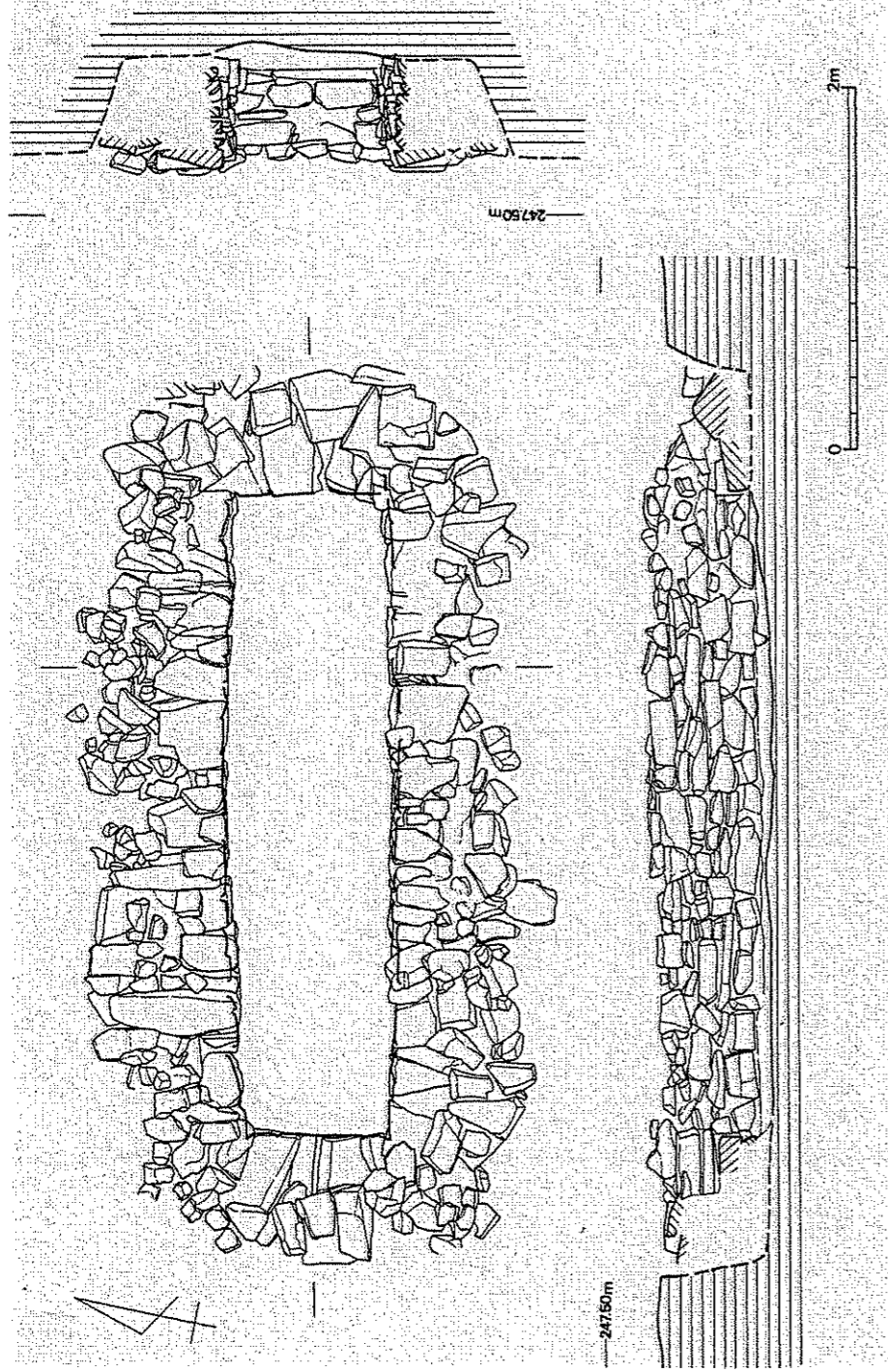
第 2 図 宮の本第 24 号古墳墳丘の模式図

はできませんでした。墳丘斜面の上端から中腹やや下方にかけては葺石が施されていました。上端から中央付近にかけては 10～30cm 大の角礫を置き、下端にはこれらの礫を支えるように 40～50cm 大とほかより大型で分厚い板状の石を貼石状に並べています。葺石下端には幅 1.2～1.4m ほどの平坦な部分があり、その外縁寄りに 30 cm 程度の間隔で円筒埴輪が樹立されていました。現状では 90 本存在しますが（2 列になる部分があるので、92 本）、もとは 100 本前後廻っていたと思われます。墳丘裾には 10～30cm 大の角礫を並べて列石としていますが、この列石の残存状況はあまりよくありません。

第 24 号古墳を取り巻く 6 基の小型古墳は、大半が箱式石棺を埋葬施設としていますが、南端の第 20 号古墳のみは南に開口する横穴式石室を埋葬施設とし、7 基の古墳のなかでは最後に構築された可能性が高いと思われます。石室の入り口には外護列石がみられます。箱式石棺を埋葬施設とする古墳の多くは成人墓の箱式石棺 1 基と小児墓と思われる小型の箱式石棺 1～2 基の組み合わせで、第 21 号古墳は成人墓と小児墓が並列、第 22 号古墳では成人墓の直上に小児墓、第 23 号墓では成人墓の 60cm 上方（斜め方向）に 2 基の小児墓が構築されていました。いずれも成人墓の上方に小児墓が造られていることや成人墓と小児墓の長軸が平行である点はほぼ共通しています。また、第 20 号古墳の石室や第 23 号古墳 SK3 を除いて、古墳の埋葬施設である竪穴式石室や箱式石棺の長軸はいずれもほぼ東西方向を指し、頭位も東側のようなようです。また、第 24 号古墳には周溝がなく、西側の 3 基（第 23・25・26 号古墳）も周溝が存在しないか存在しない可能性が高いのに対して、東側の 3 基（第 20～22 号古墳）にはいずれも幅 2～4 m の周溝が存在します。周溝内からは須恵器や鉄器が出土しています。第 20 号古墳は墳丘は円形ですが、周溝の外縁はコ字形をしています。第 24 号古墳以外の古墳の埋葬施設からの出土遺物としては、箱式石棺からは鎌・斧・刀子？などの小型の鉄器（農工具）1～2 点ずつが、第 20 号古墳の石室内からは須恵器（長頸壺・杯蓋・杯身・高杯など）や鉄釘があります。

3. まとめ

今回の宮の本第 20～26 号古墳の発掘調査は、径 30m の大型円墳の第 24 号古墳とこれを半円形に取り巻く径 10m 前後の小型円墳 6 基を一括して調査するという貴重な発掘調査となりました。計 7 基の古墳は丘陵尾根頂部から南側緩斜面にかけて近接して築かれ、周囲の古墳群からはやや離れて造られており、ひとつの有機的なまとまりをもった古墳群と考えられます。中心的な第 24 号古墳は墳頂部に 3 基の埋葬施設をもち、墳丘斜面には葺石と 1～2 列の円筒埴輪が全面的に施され、墳丘裾部には列石が廻らされていました。ほかの 6 基の古墳は箱式石棺を埋葬施設とするものが多く、南東隅に位置する第 20 号古墳は南に開口する横穴式石室を埋葬施設としています。この第 20 号古墳が最後に築かれ、中心的な第 24 号古墳はその円筒埴輪の特徴から 4 世紀末～5 世紀初頭頃に築かれたと思われる、恐らくこの第 24 号古墳が最初に築かれた古墳と考えられます。ほかの 5 基は第 24 号古墳と第 20 号古墳の構築時期の間、5～6 世紀の間に築かれたと考えられます。



第3図 宮の本第24号古墳の竪穴式石室SK1 (1:40)

以上のように、今回の宮の本第 20～26 号古墳の発掘調査は、中心的な古墳の規模の大きさや内容の豊かさをはじめ、各古墳の埋葬施設や墳丘・周溝の残存状況の良さなどから、当地域の古墳時代の墓制だけではなく、将来的には当地域の古墳時代の政治や社会状況を明らかにして行く上で貴重な資料を提供したといえるでしょう。

《メモ》